

日本学術振興会日中韓フォーサイト事業
事後評価（平成27（2015）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名：国立大学法人大阪大学（大学院医学系研究科・教授・吉森 保）

研究交流課題名 病原体・損傷オルガネラに対する選択的オートファジーの分子機構と病態生理

評価結果（総合的評価）	
☐	A 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。
☒	B 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。
☐	C ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。
☐	D 成果が十分にあるとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。
所見	
オートファジー分野の研究は国際的に活発に行われており、日本の優位性と発信力を高めるためにも国際連携は重要である。本事業では、ネットワーク形成を意識した活動が行われ、3カ国間での定期的なセミナーや研究拠点の訪問などを通じて、若手研究者の活発な交流・共同研究が進められ、各国が持つ実験技術・施設の共同利用も進んだ。研究交流の活性化、特に若手研究者の交流を通しての育成に関しては、当初の目的を達成できたと評価できる。とりわけ、拠点の研究者に限らず国内の若手オートファジー研究者も巻き込む形で、シンポジウム等を行うなど、分野全体を見据えた活動を行ったことは評価でき、将来的にはアジアにおける大きな研究基盤ネットワークが形成されることが期待される。 一方で、令和2年度からのCOVID-19の感染拡大があるとはいえ、期間内における研究成果は多くなく、有力誌に掲載された論文も少ない。中間評価でも大きな成果として挙げられた「損傷リソソーム認識に関わるE3リガーゼ」についても、期間内の論文成果になっていないことは非常に残念である。ただし、予め共同研究がある程度進んでいない限り、この期間内に人的交流を確立し目を引くような成果（国際共著論文）を上げることが難しいことは理解できる。 若手育成や国際連携は一朝一夕でできるものではなく、本事業後の継続した活動により加速度的にネットワーク形成や共同研究の成果が得られると思われる。本事業は、その足がかりとして十分に機能し、当初の目的が概ね達成されたと評価できる。	